日本人の起源

～縄文から紐解く祖先のルーツ～

田中英道
HIDEMICHI TANAKA

DIRECT

INDEX

はじめに P.03

「極東に天国がある？」日本を目指した古代人 P.06

「定説を覆す日本文明論」縄文人の骨から判明した新事実 P.10

「日本神話は嘘ではなかった」記紀に記された日本最古の国 P.14

「日高見国の変動」移動した縄文人と残されたエミシ P.17

「縄文人と神話の関係」天孫降臨とは何だったのか？ P.21

「三内丸山遺跡の謎」なぜ文字がなくても繁栄したのか？ P.24

はじめに

今、現代のことばかりを考える人が多くなり、「過去はもう忘れていいのだ」、あるいは「過去というのは、進歩の前ではほとんど考えるに値しないのだ」というような考え方が非常に多くなっています。
このことは、今回のコロナウイルスに対する世界の反応にも大きな影響を及ぼしているのです。

皆さんご存知の通り、コロナウイルスは2002年～2003年に感染爆発を起こしたSARSと同様、中国から発生し、今や世界中で死者30数万人を超える被害になっているのですが、これはわずか100年前に大流行し、全世界で4,000万人から9,000万人の死者を数えたスペイン風邪と比べれば、その規模は全く小さなものなのです。
それにもかかわらず、まるで「歴史上初めての経験」のように世界がパニックになっているのですが、それは歴史に対する知識がないためで、この程度のことでパニックになる現代というのは、決して進歩しているとは言えないのではないでしょうか。

話は変わりますが、今回私は美術史のドクター論文をフランスで書いてまいりました。
これまでにもフランス、イタリア、ドイツに留学し、ヨーロッパについて理解することができましたが、同時に日本の素晴らしさについても分かったのです。

日本は今まで、世界の美術史の中で不当に扱われてきました。
例えばジャンソンの『美術の歴史』では、日本のことにはほとんど触れられていません。
同様に、世界の文化史においても日本はほとんど添え物のような存在でした。
それは、日本人が日本の文化をきちんと紹介、あるいは発表していないからなのです。

私はもう78歳になりましたけれども、いまだに現役のつもりです。
大学を辞めて以後、このようなある意味での啓蒙運動をやっているのですけれども、それは「日本のことをもっと世界に知らせなくてはいけない、皆さんにもその良さを知らせなくてはいけない」ということを私の使命として、この生涯をかけてお話ししたいと思うからなのです。

先ほど述べたような、「現代が一番いいのだ」という戦後の考え方からすれば、「はっきり言って、過去なんてどうでもよい」というものの見方になってしまうのですが、これはとんでもない話です。

皆さんの中を流れている血というものは、日本の原初、縄文の時代から形成されていて、それが皆さんの思考や精神性の中に今も残っているのです。
現代では血液検査が非常に発達し、DNAや染色体を分析することで、皆さんがどこからやってきたのか、その起源がすべて分かってきているわけです。
そういう観点から見ても、改めて歴史をわれわれの中に取り返さなくてはいけないのです。

まず注意しなくてはならないのは、西洋人が書いた歴史をそのまま受け売りしてはいけないということです。
日本人の歴史、日本の歴史というのは日本人にしか分からない部分があり、中途半端な知識だけでは書けないのです。
これまでの世界の歴史の中で、日本がほとんど登場しないのはそのためです。

たとえ登場したとしても、「明治以降、日本はアジアの中で珍しく近代化し、そして西洋のまねをして帝国主義になった」などという部分だけが日本の評価につながっているのですが、それは全くの間違いですし、そもそも「帝国主義」という言葉も西洋の造語なのです。

今から25年前、サミュエル・ハンティントンという人が『文明の衝突』という本を書きましたが、ここで「日本は8大文明の独立した1つだ」ということを言っています。

今までは中国や朝鮮、大陸から来た文化を取り入れただけで、ある意味「中国の属国」のように、あるいは「朝鮮からみんな来たのだ」というようなことを言われていたのですが、文化の研究が進歩することにより、これらはすべて間違いだということが分かっています。
またご存知の通り、日本人は朝鮮人や中国人と全く違うDNAを持っています。
それらのことから、日本が自立した文明を持ち、そのすべてがユニークで立派なものであるということを、はっきり認識する必要があるのだろうと思うのです。

「極東に天国がある？」
日本を目指した古代人

ここでは日本の歴史について、旧石器時代の辺りから語っていきたいと思います。

旧石器時代、3万年前などというと、皆さんどのようにイメージしていいか分からないかもしれませんが、すでにそのころから日本の文化というものは非常にユニークだったのです。

ご存知の通り、世界の人類は南西アフリカから発したということは定説になっており、これはつまり、日本人も実を言うともともと南西アフリカにいた人だということになります。
南西アフリカから出発し、何世代もかけ長い旅程を経て、徒歩、あるいは船でたどり着いたのが日本だというわけです。

この辺りの研究も今本当に進んでいまして、どのように彼らが移動してきたのかが分かっています。

約10万年前から移動が始まり、約6万年前に中近東に移り住み、そしてさらに中国辺りに到達するのは約3万年前なのですが、日本にはもっと早く約4万年前には到達していることが分かっています。

その根拠として、群馬で発見された旧石器時代の遺物があります。
最初の旧石器が九州や関西ならともかく、東日本の群馬で発見されていることから、こういう旧石器、古い形の石器を使う人たちがすでに約4万年前には日本に来ていたということが分かるのです。

人間というのは、ただ食料がないからとか、単に気候が変動し寒くなったからとか、そういう物理的、物質的、あるいは環境的な1つの変動によって行動するというのが今までの考え方なのですが、そうではなくて、当時の人間にも精神があったのです。

そういう精神があるということは、ユヴァル・ノア・ハラリという人が『サピエンス全史』で書いていますが、認知する力、ある種の観念性というか、神やお金を信じるように物体よりも観念的なものを信じるということが人間の能力であると述べています。

彼は、現代ではただの紙切れを「これがお金だ」と、1つの象徴として信じている、それをもって「それが人間なのだ」というように言っていますが、彼に欠けているのは、精神性は人間の行動にもっと結びつくという視点です。それが「文化」なのです。

人間は必ず文化をつくります。
ただ食べたり飲んだりする、そういう動物的なものだけではなくて、精神性というものがあるからです。

例えば、エジプト文明では太陽神ラーを信じているということ、つまり太陽というものが、一番最初の人間の精神性、あるいは宗教というものなのです。
それは明らかに朝を意味しています。
東から昇って西へ沈んでいく、これは世界中同じなのです。
そうすると、太陽が昇る場所はどこか、そこに何かがあるのではないか、それこそが何かの始まりではないかということを感じざるを得ないのです。
先ほど述べたエジプトもそうですし、あらゆる文明が太陽神というのを基本にしています。

ギリシャではアポロ、エジプトではラーのほか、アテン、アトゥム、アメン、それからケルトではヘルメスというのがありますし、中国、ペルシャも同様で、あらゆる文明が太陽神を拝んでいるのです。

西の国々、つまりアフリカから発した各国の文明の太陽信仰が日本に向かってくるのは必然です。イギリスのヘレフォードにある、中世の寺院に保存されている「ヘレフォード図」という不思議な図、世界地図があるのですが、この地図は東が一番上にあり、そこがあたかもパラダイス、

天国のような描き方をしていて、おそらくユダヤ人が書いたのでしょう、中央にエルサレムがあるわけです。

もちろん、キリスト教、ユダヤ教、場合によってはイスラム教もエルサレムが中心で聖地です。そこを中心として一番高い所に東があり、そこをよく見ると、どうも日本のようなある種の島が描かれています。

つまり、昔から日本は「東の果てにある一番のパラダイス」と考えられていたのではないでしょうか。
これは後になると旧約にも出てくるのですが、これについては後でお話しします。
とにかく、そういう東の果てにある日本という国、これが世界におけるある種の精神的な目的地になったと考えられるのです。

日本人は、自分の国の名前が「日の本」というのにもかかわらず、実は「世界のもと」という意味合いがあることを分かっていないのです。
同様に、日の丸の旗、若者はみんなこれを振ってサッカー、あるいはラグビーを応援していますが、日の丸が「太陽」だということを全然分かっていないのです。

例えば、皆さんも富士山にはただ登るだけではなくて、一晩過ごしてご来光を拝むわけですが、そのご来光というのが、つまり日本なのです。
太陽が昇る所を見る、その国が日本なのです。
ですから、富士山で太陽を見るということは、「世界で1番早く太陽が昇る」のを見ているということなのです。

そのことを今みんな忘れてしまっています。
それは、18世紀以後、近代になるとすべてが西洋中心になってしまい、西洋以外のものは認めようとしない、そういう考え方が出てきてしまったからなのです。

それが明治以降皆さんにも伝わって、「日本は大した国ではない、西洋に遅れている」という考え方になってしまうわけです。
ですから、「西洋で、あるいは西洋の延長であるアメリカで起こったことは、すべて偉いのだ」、あるいは「それはまねすべきものだ」という

ふうに思ってしまう、そういう思考パターンが身に付いてしまったわけですが、それは逆なのです。

本当は、日本が中心なのです。
それは地理的あるいは自然環境が非常に良かったことも要因なのですから、中心だからといって別に威張る必要はありません。
ただし、そこに住んでいる日本人はもっとそれをしっかりと自覚しなくてはいけません。

日本に来た人たちは、先ほど述べましたように太陽信仰を持っていました。実は、太陽信仰というのは、太陽を拝むだけでいいのであまりものを作らないのです。日本の九十九里浜、あるいは東北の東海岸には、今は確かに鹿島神宮、香取神宮がありますが、ほかには何もないのです。

つまり、日本の信仰、自然信仰というのは太陽そのものが対象なのです。

実を言うと、伊勢神宮というのは後の時代、アマテラスという神様を一応神話で創った後、造られたわけです。
しかし、鹿島神宮ではどういう形態をとっているのかというと、まず大きな鳥居があります。

ところが、それを越えて進んでも奥社があるだけで何もないのです。
その道は太陽が昇って降りる、その通り道なのです。
ですから、太陽が昇るのをずっと見て、そして沈むのを見る、それを拝むところが鹿島神宮なのです。
ですから、本殿が北を向いて通りの横にあるわけです。

それで分かるように、日本人の一番の信仰は太陽を拝むこと、月もまた同じです。
月読命（つきよみのみこと）がいても、月読命（つきよみのみこと）の神社がないというのは、やはり月を拝むだけですから、どこへ行っても拝めるわけです。

このように、太陽と月が日本人の拝む基本的な対象ですが、結局伊勢神宮という太陽信仰、つまりアマテラスだけが造られ月読命（つきよみのみこと）の神宮がないのです。
多分、今の出羽三山の月山、あそこがおそらく月を一番近い所で拝むという、そういう意味合いがあったのだろうと思うのです。

いずれにしても、日本は岩なら岩、木なら木、山なら山、それ自体が神様でしたから、それを拝むということになるわけです。

世界から日本にやってきた人たち、つまりアフリカから出発した人たちが日本までやってくると、とにかくまず関東東北に行ったわけです。
群馬に最初の旧石器時代の遺跡があるので、それが分かるわけです。
そして、縄文、弥生、特に縄文は関東と東北にしかほとんど遺跡がありません。

縄文の後期まで、関東と東北にしかほとんど遺跡がないのです。
これについてはいずれお話ししますけれども、弥生になって初めて関東から九州に移動します。

邇芸速日命（にぎはやひのみこと）、あるいは瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）がいわゆる天孫降臨をされて、奈良や九州へ行くという、それが神から人間という1つの歴史になるわけです。
しかし高天原といわれる時代には、まさに関東東北しかなかったのです。

そのことも非常に重要なことで、日本人は日本だけにいると視野が当然狭くなるわけで、今まで日本の歴史をそういう大きな視点から見ることがなかったのです。
そしてやはり明治以降、西洋中心史観が入ってきて、ますます日本にそんな立派な歴史があったと思わなくなるわけです。
しかし、日本に最初に来た人たちはすべて西から来た人たちなのです。

ですから、日本人を見るといろいろなタイプの人がいるのです。
これは朝鮮やモンゴル、中国とは違います。
中国、モンゴル、あるいは朝鮮というのは、大体二次元的な顔をしているわけですが、日本人は三次元的な、立体的な顔をしている人が多いのです。

もちろん二次元的な顔をしている人もおり、例えば、浮世絵美人というのはどちらかというと二次元的顔立ちです。

実を言うと、ある種の背が高く、鼻が高い、そういう人たちが古代にはいたのです。
縄文期の遺跡で見つかった骨は、今と結構違って鼻が高かったり、三次元的な顔をしているのです。
このように、いかにも西から来た人たちだということが分かるのです。

何度も言うように、朝鮮や中国の血液型とも違いますから、西から来ているということは明らかです。
そういう新しい視点をしっかりと歴史に取り入れないと日本の歴史が分かりませんから、いずれは日本の教科書もそう変わってほしいと思っています。
そういうことが一番重要なことなのですが、いまだに日本は朝鮮や中国から、せいぜいモンゴルから来た人たちだけだと思っている人が多いのです。

しかしその前に、西から来ているのです。
中国も、実を言うと西から来た人がいるのですが、定着した時間が長いために、ああいう二次元的な顔になっていくわけです。

日本には船で来ている人も多いのです。
中東にゴブスタン遺跡という、アゼルバイジャンの黒海沿岸の遺跡があります。
先日そこに訪れて発見したのですが、船の遺跡があり、船が描かれているわけです。
非常に巨大な船なのですが、面白いのは、一番先頭に太陽が描かれているのです。
つまり、この船は太陽に向かって漕いでいたということが分かるのです。

これはエジプトでも同様です。
ラーを先頭に立てて船が描かれていて、太陽に向かっていくということを暗示している壁画が描かれています。
つまり、これは決して私だけが言っているのではなく、こういう巌窟の壁画にもそういうことが描かれているのです。

先ほども述べましたように、世界図を描くと一番上に東が来て、そこに日本らしい島が描かれている、あるいは朝鮮があり、そこから島が描かれているというような図が残っています。

それから、カトリックの教会堂、大きな寺院に行くと、いわゆる内陣という所は必ず東を向いているのです。
それは、「光は東方より」という感覚があったからで、そういう生活が人々を律していたわけです。

そうなると、日本に向かってくるのは当然なことなのです。
「あのころは原始的だから、距離も方向も分からなかったはずだ」と考えがちですが、そのようなことはあり得ないのです。
太陽の昇るところに向かっていけばいいわけですから、それほど難しいことではありません。
でつまり、太陽に向かうということがあらゆる科学のもとであったわけで、それによって初めて大地というものがどういうふうに構成されているか、つまり東と西、必ず方向があるのだということが分かるのです。

それから、日の入り日の出というのは季節によって変わっていく、そういう秩序というものを太陽が持っているという、非常に大事なことが分かるのです。
日本に来た人たちはそういう太陽の秩序を知っていますから、もう神様は必要ないのです。

つまり、太陽を見ていればいい、あるいは太陽と月を見ていればいいのです。
月の満ち欠けと女性の月経の関係というのはまさにそれです。
つまり、あらゆることが月と太陽で考えられるということが基本なのです。
ところが、後なってユダヤ人たちは自然の上に神様を創ってしまいました。
それを語るとまた長くなってしまいますので、別の機会といたします。

「日本神話は嘘ではなかった」
記紀に記された日本最古の国

実を言うと私は、神話と歴史は結びついているということを考えています。
『日本書紀』とか『古事記』、あるいは『魏志倭人伝』というものに書かれているもの、それを歴史に結びつけようと考えているわけです。
津田左右吉以来、戦後の多くの歴史家たちは「神話に書かれていることは荒唐無稽な話で何だか読んでもわけが分からない、それ自体がフィクションである」と、そう言って片付けていたのです。
ところが、私は自分の仕事をやっているうちにそのことに気が付いたのです。

レヴィ＝ストロースという人はユダヤ人の世界的な文化人類学者で、私は学生のころ講演会を見たことがあるのですが、実は、この人が1980年ごろから「日本が非常に面白い」と、しきりに来日していました。
彼はもともと中南米のインディアンたちの研究を行っていた文化人類学者で、彼らの風習や神話、どういう人たちが生きていたのかを取材していたのです。

彼はそういう研究をする中で、「それらが現代にきちんと対応している」ということを述べ、私はそれに非常に共鳴したのです。

それからもう1人、アンドレ・マルローという人がいました。
この人は美術を勉強した人で、戦前は『人間の条件』や『希望』などいろいろな小説を書いた大小説家だったのですが、特に日本、東洋に非常に興味を持っていて、『人間の条件』はキヨという日本人が主人公です。

そのように東洋に着目し、そして革命的思想もあり、スペイン革命にも参加したという、ある意味左翼的な人だったのです。
ところが、戦後はそれを止めてしまいました。

そして彼はニヒリストですから、「神なき世界では芸術が神となる」という考え方を掲げ、世界中の芸術、美術を研究し、日本にも3〜4度来ています。

同じようにレヴィ＝ストロースも晩年である70歳ごろから来日しているのですが、ただ単に日本を研究するのではなく、翻訳されている日本の神話をとにかく興味深く研究して、「日本ほど神話と歴史がつながっている国はない」と言うわけです。

アンドレ・マルローは、世界の基本的な文化として日本を認めていて、日本の美術、特に肖像画、あるいは仏像を非常に褒めています。
それほどに系統的に書いていませんから、皆さんはあまりご存知ないでしょうが、こういうフランスの非常に優れた知識人が日本を公平に見ているのです。

私はフランスに留学していましたからよく分かるのですが、フランスという所は西洋の中心地であると同時に、割合大きな視点で世界を見ることができる民族なのです。

先ほども述べましたように、レヴィ＝ストロースはユダヤ人です。
多くのユダヤ人がフランスだけではなく、イギリス、もちろんアメリカにもいるわけですが、そういう人たちは比較的公平にものごとを見ようとするのです。
やはりフランス人によるフランスの歴史というのは、フランス中心になってしまいますし、ドイツもまた同様です。
しかし、ユダヤ人は割合世界を俯瞰（ふかん）して見る、そういう人たちが多くなります。

レヴィ＝ストロースは九州を訪れ、「歴史が続いているということが分かった」と述べたのですが、私の場合、奈良はもちろん、関東でもそれが分かったのです。

それによって私は、「日高見国」という国が実在したのだということを言っているのですが、日高見国という名前は記紀、つまり『古事記』、『日本書紀』の両方に出てくるわけです。

ところが、この記紀が作られたのは7世紀から8世紀の初めですから、これはその時に作られた神話なのです。
やはりそれ以前の紀元前、弥生前の世界についてはほとんど記録がないため、分からないのです。

彼らが7世紀、8世紀の時点で書いたのが『古事記』なのですが、ここには富士山が1回も出きませんし、東国のことはほとんど触れられていません。
これは記紀の欠点であるのですが、同時に大和、つまり関西方面に日本の権力が移動したということを示してもいるわけです。

縄文遺跡の分布図を見ても、ちょうど弥生以降、すべて西に遺跡が残るわけです。これは、縄文から弥生にかけて1つの変動が起きたことを意味しているのです。つまり、人々が東北関東から関西に、あるいは九州に移っていったということです。

「日高見国の変動」
移動した縄文人と残されたエミシ

これはなぜかというと、まず寒冷化が理由に挙げられます。
なぜ三内丸山に5,500年前から1,500年間も人々が住み続けたのかというと、あの地域は温暖だったからです。
現在のような気候、つまりあれほどの雪が降るのであれば、住むには適していません。
ですから、縄文時代には温暖であったということなのです。

九州はもちろん、北海道にまで縄文の遺跡がありますけれども、東北関東は温暖だったためにたくさんあるわけです。
新潟、あるいは長野などは今でこそ冬には寒いのですが、そういう所からも5,000年前〜4,000年前の、縄文中期の見事な縄文土器がたくさん出てくるわけです。

このように、今と違った東国の姿があったということです。
これが後になると蝦夷になり、エミシなどのいわゆる差別用語が生まれてくるのですが、ちょうど記紀が書かれるころから東国がエミシになってくるわけです。
それは、基本的に移動することなく残った人たちだけが東国にいるということになり、そこに新しい移民が入ってきたために、そこがエミシ、あるいは毛人になったということが言えると思うのですが、それはまた今度お話しします。

日高見国というのはどういう国だったのかといいますと、「日が高く昇る国」という意味で、これは『風土記』にも出てきます。
ただし、『風土記』や『古事記』、『日本書紀』では、すべて否定的な意味あいで語られているのです。
「日高見国っていうのは強い国だ、非常に広い国だ、豊かな国だ」と言いながら、「人間そのものはすぐに従う」などと言われ、彼らは野蛮人とまでは言いませんが、とにかく軽蔑しているわけで、それが次第にエミシになっていくのです。

しかしそれは、日高見国というものがあったという証拠でもあるわけです。

今も東北には、北上川という川があります。
北の上（かみ）だからそういう名で呼ぶのだろうと思われているのですが、「これは日高見川だ」と土地の人は言うわけです。
そして、宮城を含めたあの辺りには日高神社という神社がたくさんあります。
それから鹿島神社、香取神宮、香取神社など、東国にあった神社がたくさんあるのです。

これまで、このような東国に対する研究はあまりなされていませんでした。
東国の人は西にコンプレックスを持ってしまっていて、自分たちを自ら「東北人というのは暗い人だ」とか「貧しい人だ」というふうに思っているのです。
私は東北大学にいましたからよく分かるのですが、それはとんでもない話です。
余談になりますが、私自身は東京出身ですけれども、母親は鹿児島出身で、戦中に東京へ移り住みました。

明治の日本海軍などは鹿児島出身者が主体であったように、鹿児島や長州、つまり薩長というのは明治以降非常に力を持っていたのです。
それについてはまた別の話になるのですが、江戸時代に西洋に対して一番門戸を開いていたのが薩長だったのです。
そのような経緯があるため、明治政府の時代、外国に対する態度をリードしたのは薩長なのです。

薩長の薩摩とは何か、ご存知の通り鹿児島ですが、鹿児島というのは面白いところです。
鹿児島という名前に、子どもを意味する『児』という文字があるのはなぜか、明治時代には鹿児島出身者が中心であったのなら、『児』という文字があるのはおかしいと思うのです。

ところが、あれは「関東の鹿島の子」という意味があることを知って、初めて理解することができるのです。
つまり、関東から鹿児島へ移り、そして宮崎から東征したのが神武天皇だということを意味しているわけです。
今の日本史では、関東東北を無視してそういうことにも触れないのです。

『空白の日本史』というタイトルを持つ、東大の先生の本がありますが、関東東北のことを一切述べない自分自身が空白であることにも気づいていないわけで、これこそがまさに「空白」なのです。
これは記紀が関西でできたからで、その結果、大和国しか考えないことになるわけです。
ですから、今私は「日本国史学会連続講義」でその読み替えをしています。

例えば、『万葉集』では富士山のことをあれこそ日本の天地（あまつち）の原郷だと、すぐに富士山が出てくるのです。
ところが『古事記』『日本書紀』になると一切出てきません、それは関東を無視しているからです。

これについてもまた後でお話しをしますけれども、『日本書紀』にも日高見国という名前がきちんと出て、ヤマトタケルもそこを征服したと言っているわけです。
そして、鹿島香取の辺りに高天原という名前の3つの土地も出てきて、いまだに残っています。

これらのことから、やはり関東に高天原があった、それはつまり日高見国であったということが徐々に分かってきたのです。
新井白石という江戸時代の学者も「日本では神は人だったのだ」と、同じことを言っているのです。

私ほどはっきりと歴史的に述べてはいませんけれども、「関東東北に人がいたから、その先祖が神になり、それが神族となって、奈良、大和、

京都をつくったのだ、関西をつくったのだ」ということを言っているわけです。
そして縄文の時代、いかに関東東北に人口が多かったのかということも、日高見国の存在は結びついてくるわけです。

「縄文人と神話の関係」
天孫降臨とは何だったのか？

日本では、あらゆる古いできごとは神社がその足跡をきちんと残しています。
ですから、アマテラスの神社はもちろん伊勢神宮ですけれども、鹿島神宮は建御雷神（たけみかづちのかみ）、それから香取神宮は経津主神（ふつぬしのかみ）、全部神話の神々がきちんと関東にいるということが分かるのです。

『新撰姓氏録』（しんせんしょうじろく）という、815年にできた京都のすべての氏族を分けている記録があります。

その中の「神別」というのがつまり「神の人たち」ということなのですが、それはちょうど関東東北の人と同じなのです。
藤原氏、物部氏、忌部氏、みんな関東出身の人たちということで、神様、神別に入ります。

そして神武天皇以来、大和で生まれた人たちというのは皇別、それからもう1つは帰化人たち、秦氏や和氏など、中国や朝鮮から来た渡来人たちがいるわけです。

ただし、朝鮮から来たといってもそこを経由してきただけという人たちが多く、これは弓月君（ゆづきのきみ）と言ったりしますが、これも後でお話しします。

いずれしても、このように日高見国の人たちが高天原を形成しているのだということがほぼ分かってきたのです。

さらに検討していきますと、日高見川があり、北上川があり、日高神社があり、北海道には日高地方があります。
また埼玉にも日高市があり、今の美濃、名古屋や岐阜の方には飛騨地方がありますが、これもつまりは日高です。

そのほか伊勢にも日高地方があるなど、日高という言葉が残る地名は結構多いのです。
これはもう日高見国があったという記憶なのです。
そうやって見ることによっても、日高見国が実在したことが分かるのです。

そして決定的なのは、祝詞を読むと必ず「大倭日高見国が日本だ」と書いてあるわけです。これは宮司さんに聞けばすぐ分かるものです。
今までは日高見国というものが分からないため、「大倭日高見国というのは何だろう、日本と言うのではないか」、あるいは「大和国でいいではないか、これは大和を重複して言った言葉なのだ」というふうにしか理解されていませんでしたが、私はそう思いません。

やはり日高見国というのは実際にあり、関東甲信越から北東にかけて、これがすべて日高見国と言ったのだということがよく分かるのです。
ですから、それだけ広い地域にいた人たちがちょうど縄文の人たちに重なるわけです。
こういう新しい目で見ると、本当に日本の歴史というのは面白いと思います。

縄文人はすべて、今で言う外国人の顔、つまり彫りが深い顔をしているわけです。
アイヌ人も縄文人と顔立ちは似ていますけれども、彼らは12〜13世紀にモンゴルによってオホーツクに追われて日本に入ってきた人たちで、縄文と関係ない人たちです。
縄文人というのは、北海道に以前より定着していた人たちなのですが、後に寒冷化によって全て西へ移動します。
「凍え死ぬよりも移動した方がいい」ということで移動したわけですが、これが神話の中では「天孫降臨」として語られているのです。
高天原というのは関東東北から中部地方にまであった、そういうことが言えるわけです。

このように、縄文時代に日高見国があったということを、まず頭に入れる必要があるわけです。
日高見国そのものは地域としてはずっとあったと思うのですが、それが国として意識されたのは一体どの時期であったのでしょうか。
この時代は非常に人口が少なく、いまだにはっきりした人口は分からないのですが、数万とか十数万という単位で点在していたわけです。

また、関東を中心とした日高見国、つまり鹿島香取を中心とした近辺の、貝塚や縄文遺跡が非常に多い辺りが中心地であっただろうと考えられます。
そしてもう1つ、それと似た別の中心地が仙台あるいは青森、青森は三内丸山にあった可能性があります。

そのように点在していたものが、都市連合、あるいは地域連合の形をとって、その中の高御産巣日神（たかみむすびのかみ）、おそらくこれが家系としての天皇の始まりとなるのです。
日高見国と高御産巣日神（たかみむすび）は関連性が高いと思われます。
高御産巣日神（たかみむすび）という名前には「結ぶ」という言葉が含まれていますが、これは先ほどお話ししましたように、国を結ぶ、縄文と同じ意味があるわけです。
次の時間では縄文土器や縄文土偶についてお話ししますけれども、「結ぶ」ことによって内部を聖化する、結界あるいは別の世界、別の精神世界と見る、という意味があるわけです。

ただし、都というものが果たしてあったのかと考えると、おそらく都はつくらなかったのだろうと思います。
都というのは、天皇がおられる所と、その周りを取り囲む宮廷によってつくられるのですが、天皇によってどんどん変わっていたのです。
何代にもわたって、奈良や京都など同じ場所にいるということが決まったのは7世紀以降なのです。

「三内丸山遺跡の謎」
なぜ文字がなくても繁栄したのか？

これはご存知だと思うのですが、天之御中主（あめのみなかぬし）と高御産巣日神（たかみむすびのかみ）、それから神産巣日神（かみむすひのかみ）という、この3つが最初の三柱の神だということを『古事記』や『日本書紀』が言っているわけです。
その真ん中の人、おそらく天之御中主（あめのみなかぬし）というのが太陽のことだろうと思います。

それから高御産巣日神（たかみむすびのかみ）というのがまさに人間神で、それが天皇の、アマテラス以前の祖先です。
ですから、この2人、2人と言うと失礼ですが、この二柱の神を今の天皇家も継いでいるのです。

これがいつごろから始まったのかということですが、ご存知の通り、この時期にはたくさんの部落ができており、東北で発見された大平山元遺跡ができた1万6,500年前、あるいは1万年前ごろから朝鮮、中国だけではなく西からもどんどん日本にやってきている中で、国として形成されていったと考えられます。

あの時代になると、かつての古いことは口述もされなくなってきているわけですが、『古事記』や『日本書紀』の神話の中に、きちんと高御産巣日神（たかみむすびのかみ）、あるいは天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）、つまり「最初にこの三神が現れた」と言っているころが、その最初だろうと思うのです。
私はそれらのことから、基本的に1万年前ごろから日本には国があったのではないかと考えています。

それまでは穏やかな、緩やかな家族連合であったことが予想されるわけですが、遺跡が徐々に多くなっていく縄文中期には非常に人口が多くなってくることが分かっており、そのことからも7,000年前～5,000年

前、三内丸山ができたのは5,500年前ですが、そのころにはすでに日高見国ができていたのではないかと思われるわけです。

そのころは文字がありませんし、文字を必要ともしていませんでした。
これも大事なことで、当時の日本に文字がなかったことを、皆さんは「中国にはすでに文字があり、世界でもシュメールの文字があるのに、日本は遅れているのではないか」と考えるのですが、そういうことではないのです。
文字が誕生する以前には口承がまずあって、それをお互いに記憶し合っていました。
お互いに会うということには文字は必要ないのです。

なぜなら、その人に会いに行けばいいわけで、それを記録する必要はないのです。
それは信頼関係ができているからです。
例えば、今でも金銭の貸し借りを口頭で行っても、信頼関係がある人たちの間では問題がありません。
文字を書くということは、つまり契約することですから、信頼関係の強いところではあまり必要がないのです。

そもそも日本は島国でどこにいるのかが分かりますから、信頼関係がありさえすれば逃げることができません。
逃げることができないから、口で約束したものをお互いに守るということがずっと昔から行われてきたのです。

縄文の時代には戦争がほとんどありませんでしたが、それは、それだけの信頼関係、話し合いの世界、ゆずり合いの世界、そういうものがあったのだろうと思います。
その結果、記憶力のある人が語り部となり、お互い次々と話して伝えていくわけです。
今でも家伝などを、もちろん書く人もいますが、ほとんどは親方が弟子に話を口で伝えているのです。
文字がなくてもきちんと国があり歴史があったのは、日本がちょうどいい面積であったこともその理由であります。

私は縄文時代に日高見国があったということを強く主張しているのですが、そうでないと、なぜ三内丸山のような組織だった遺跡が出てきたのかを説明できないのです。
それから、いわゆる縄文時代の竪穴住居、つまり火を付けられればすぐに燃えてしまうような家が成り立つのは、やはり火を付けるような人がいないという、ある種の信頼社会があるからなのです。

つまり、ある種の了解事項を中心的に作る誰かがいるわけです。
「この人は信頼に値する人なのだ」という、信頼関係があるのです。
このことから、私は縄文時代の日本では何が重要だったのかというと、家族だと思うのです。

家族が基本単位となり、1つの竪穴住居に住んでいました。
そして人間というのは1人で生まれるわけはないのですから、必ず親戚がいるのです。
母親がいれば兄弟がいる、親がいる、そのような血縁関係が必ずあります。
それが連合してできたものが日本の国家というものですから、日本は国家という言葉に「家」という文字が含まれているのです。

これまでも繰り返し述べていますが、states（ステイツ）やnation（ネイション）にはfamily（ファミリー）が全く含まれていないのです。
ですから西洋の近代国家論というのはすべて間違いなのです。
「家という単位が集まって国家というものをつくるのだ」ということを、日本が初めて言っているわけです。

DIRECT

ダイレクト出版株式会社

〒541-0052 大阪府大阪市中央区安土町2丁目3-13 大阪国際ビルディング13F
TEL 06-6268-0850　FAX 06-6268-0851